

[原著論文：査読付]

大学初年時教育としてのアカデミック・ライティング教育 －九州共立大学での「日本語表現法Ⅰ・Ⅱ」授業実践とその分析

大場健司¹⁾，大川内夏樹²⁾，二宮愛理²⁾

Academic Writing Education as The First-Year Experience Program: An Analysis of Practice in “Japanese Expression I and II” Classes at Kyushu Kyoritsu University

Kenji OBA¹⁾ , Natsuki OKAWACHI²⁾ , Airi NINOMIYA³⁾

Abstract

This paper is intended as an analysis of practice in “Japanese Expression I and II” at Kyushu Kyoritsu University. Until now, research on “Japanese Language Expression” classes in university education has often been conducted in the field of Japanese language education. However, the majors of the teachers in charge of such classes cannot be reduced to Japanese language education or Japanese linguistics. In fact, all three authors of this paper majores in literature; comparative literature (Oba), modern Japanese literature (Okawachi), and classical Japanese literature (Ninomiya). Therefore, it would be possible to practice and analyze “Japanese Expression” classes from a broader perspective, such as general education including literature, or the First-Year Experience (FYE) program. Therefore, this paper analyzes our practice of “Japanese Expression I and II” classes.

KEY WORDS : Academic Writing, First-Year Experience Program, Japanese Language Education, General Education, Curriculum

1) 九州共立大学共通教育センター
2) 九州共立大学スポーツ学部

1) Career and General Education Center, Kyushu
Kyoritsu University
2) Faculty of Sport Science, Kyushu Kyoritsu University

1. はじめに (大場)

これまで大学教育における日本語表現法系の授業に関する研究は、国語教育の分野で行われることが多かった。しかしながら、このような授業を担当する教員の専攻は国語教育や国語学には還元され得ない。すなわち、教養教育や初年時教育 (First-Year Experience Program) といった広い視座から日本語表現系の授業を分析することもできよう²⁾。そこで本稿では、3名の文学研究者による「日本語表現法Ⅰ・Ⅱ」の授業実践を収録している。

近年、日本各地の国公立大学で日本語表現法系の授業が開講されているが、その背景には大学の大衆化によって生じた、新入生の学力格差があり、1990年代に学習院大学や桜美林大学で「表現法」や「文章表現法」といった科目が新設されると、それが他大学に広まっていったという¹⁾。このような学力格差は今後さらに拡大すると言ってもよい。国語教育に限って言えば、文部科学省の「高等学校学習指導要領 (平成30年告示)」では、高等学校では「現代の国語」、「言語文化」が共通必修科目となり、「論理国語」、「文学国語」、「国語表現」、「古典表現」が選択科目となった³⁾。この選択科目の選び方は三層構造となっており、トップクラスの高校は「文学国語」・「古典表現」、それ以外の進学校は「論理国語」、大学進学を目指さない高校は「国語表現」を選択する傾向があるという⁴⁾。言い換えれば、高等学校の時点で階層化が行われ、階層によっては文学や古典にほとんど接することがないのだ。そして、そのような高校生が大学に進学したとして、アカデミックな教養に基づくレポートやプレゼンテーションで困難がつきまとうことは容易に想像できる。

そこで本稿では、大学で学び始める学生に教養の基礎を学ぶ機会を与えるものとして、九州共立大学での「日本語表現法Ⅰ・Ⅱ」を位置付け、その授業実践を収録している。アカデミック・ライティング (Academic Writing) 教育と大学初年時教育を兼ねながらアカデミックな教養を教える教育の実践報告となっているだろう。

2. レポート (大場)

本節では、「日本語表現法Ⅰ」におけるレポート執筆指導 (全7回分) に焦点を当てる。第1回「資料の検索方法」では、レポート執筆における「CiNii」 (<https://cir.nii.ac.jp>) や「国立国会図書館サーチ」 (<https://iss.ndl.go.jp>) を用いた資料調査方法を扱った。また、大場の授業では国立国会図書館の「リサーチ・ナビ」 (<https://rnavi.ndl.go.jp/jp/index.html>) や九州大学附属図書館のWeb学習ガイド「Cute. Guides」 (<https://guides.lib.kyushu-u.ac.jp>) を参考用に紹介した。

第2回「レポートの文体」、第3回「事実と意見」では、アカデミック・ワードを用いたレポートの文体や、事実／意見の区別、自分の意見と先行研究の意見の区別の重要性を扱っている。

第4回「レポートの体裁」、第5回「問いの立て方」、第6回「文章の構成」では、レポートの表紙や本文ページをパソコンで作成する際の形式や、レポートの三段構成 (序論「問い」→本論「展開」→結論「答え」)、文章での結論の位置 (頭括型、尾括型、双括型) を扱っている。また、レポートのテーマを絞り込むためのアウトラインやマインドマップといったメモ書きの書き方も扱っている。第7回「参考文献の書き方」では、参考資料の引用の仕方、及び参考文献の書き方を詳細に扱っている。

以上のようなレポートの執筆方法は、大学に進学したばかりの1年次の学生には難しいかもしれないが、アカデミック・ライティングの基礎である。そこで、学生が少しでも積極的に授業に参加できるよう、大場の授業ではワークシートの課題に取り組む際に、グループ・ディスカッション (Group Discussion) やペアワーク (Pair Work) といったアクティブ・ラーニング (Active Learning) の手法を導入している。

3. プレゼンテーション (二宮)

本節では、全学部二年次配当の必修科目「日本語表現法Ⅱ」における「プレゼンテーション」に関わる授業実践を記す。

3.1. プレゼンテーションを授業で扱う意義

在学中におけるプレゼンテーションの実践として、最も身近に想定されるのは、専門分野のゼミ、演習の授業である。三年次、スムーズにゼミの活動に移るためには、調査や文章化、発表といった研究活動について、具体的にどういったことが求められるのかを二年次までに想像させ、理解させておく必要がある。また、昨今、採用方法が多様化しており、プレゼンテーションが試験科目として課されることがしばしばある。このこともプレゼンテーションに対する学生のモチベーションを向上させる要素である。特に、教職を目指す学生にと

っては、日々の授業がプレゼンテーションの実践である。この点は、在学中には実感が沸きにくいことであるため、教員から意識を促す必要がある。

3.2. プレゼンテーションに関わる授業構成

プレゼンテーションに関わる授業は〈レジュメの作成〉と〈プレゼンテーション〉に分かれている。当該授業は、アカデミック・ライティングの中心となるレポートと、論理的思考の訓練となる小論文を、それぞれⅠとⅡの中心に据える構成となっている。その中で、プレゼンテーションは、その内容や構成がレポートと一致している一方、論文的な書き言葉だけでなく、口頭発表に適した話し言葉による説明を必要とする場合もある。そのため、Ⅰで身につけた研究の手順に則って発表全体を考える〈レジュメ〉の回、それを踏まえて発表全体を整えるという発展的な内容の〈プレゼンテーション〉の回で構成されている。

実際に発表を準備する際、「先行研究の確認」や「レジュメの作成」、発表のための「読み原稿の作成」などといった作業は、順番が前後したり、同時に行ったりすることがほとんどである。そのため、〈レジュメ〉と〈プレゼンテーション〉の内容を相互に確認しながら仕上げていく意識を持たせることが重要である。

3.3. 練習問題による授業実践

以上のような点を学生に理解させるため、授業では練習問題を提示している。

まず、〈レジュメ〉の回では、「発表資料の文字の見やすさ」を考える問題（Fig. 1, 2）を課している。紙やスクリーン、PC画面等で同じ文章を見せ、色やフ

ォントの差によって、読みやすさにどういった違いが表れるかを学生に考えさせ、個人の認識能力や慣れによる感覚の違いを学生に実感させることを狙った問題である。フォントの可読性、美感性には、年齢層による感覚の差があることが報告されている⁵⁾。特に日常的に高齢者に接することになる行政職や介護職を目指す学生にとって、世代を問わない視覚的な見やすさ、分かりやすさといったユニバーサルデザインの意識は特に重要である。授業では挙手で回答を提示させているが、一つのクラスの中でも反応が分かれることがしばしばあり、自分の感覚が絶対ではないという意識を持つ機会になっている。

次に、〈プレゼンテーション〉の回では、「読み原稿とスライドの文字数感覚」を考えさせるため、1分間あたり300字を目安にした読み原稿（Fig. 3）と、それに対応したスライド案（Fig. 4）を提示し、読む実践を行っている。この練習問題は、発表の進行速度の感覚や、読みやすい言葉選びを意識させるだけでなく、読み原稿と発表資料の関係性について理解させたり、作成の手順を考えさせたりといった目的もある。例えば、スライドは発表のアウトラインでもあるため、発表の全体的な構成を考えるツールとして活用できる。そこで、資料と原稿の作成手順として、スライドでアウトラインを作ってから間を埋めて文章化し、読み原稿にしていく方法や、逆に原稿を先に作ってからキーワードのみを残す形でスライドにする方法など、考えたことを効率的に発表の形にすることを紹介している。

言語によるコミュニケーションには文章力だけでなく視覚や聴覚にも気を配る必要があるということを、学生に意識づける実践を今後も模索したい。

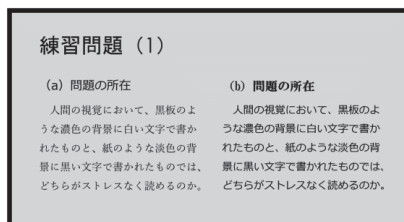


Fig. 1 II-2 練習問題 (1)

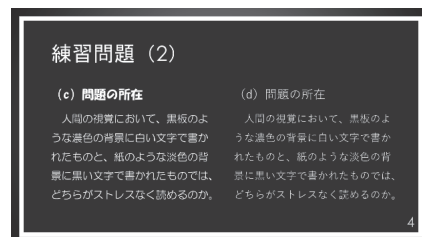


Fig. 2 II-2 練習問題 (2)

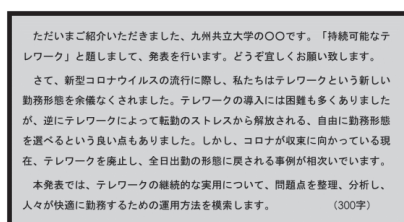


Fig. 3 II-3 練習問題 (1)

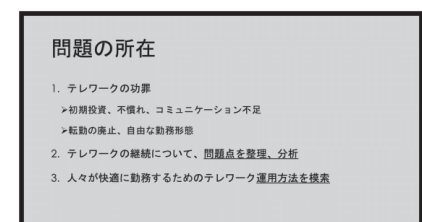


Fig. 4 II-4 練習問題 (2)

4. 小論文（大川内）

本節では、二年次の必修科目「日本語表現法Ⅱ」における「小論文」に関する授業実践について述べる。

本科目での小論文の授業では、就職活動における小論文試験対策が目的の一つとなっている。しかし今道（2018）が「公務員試験，教員試験，大学・大学院入試，昇進試験，病院採用試験，マスコミ採用試験……」世の中には、ありとあらゆる小論文試験があります。さらに、エントリーシートや研究計画書，補助金や奨学金申請書の「申請理由記入欄」などの書類も、「書いた文章が可否の判断材料にされる」という意味では、小論文試験と同じです。こうした試験や書類と一生無縁でいられる人は、まずいないでしょう⁶⁾と述べているように、小論文やそれに類する文章の作成を要求されることは日常生活においてしばしばある。そこで本科目では、就活試験を含む様々な場面で、自身の考えを説得力のある文章で表現する力を育むことを目指して授業を行っている。

「日本語表現法Ⅱ」では、全15回中4回の授業を使って、「問題提起」，「意見提示」，「展開」，「結論」の4パートに分けた書き方を教えている。それぞれのパートの役割としては、「問題提起」は小論文の問いの設定，「意見提示」は「問題提起」に対する意見の提示，「展開」は具体例等を活用しての自身の意見の妥当性の証明，「結論」は意見のまとめとなっている。このような4パートに分けて自身の意見を説明する書き方は汎用性が高く、就活の小論文試験以外の場面でも有効な形式であると言える。

そして本科目の小論文指導において、一つの重要なポイントになっているのは「意見提示」に関する部分である。先にも述べたように「意見提示」では、「問題提起」に対する答えを書くことが第一の目的であるため、自身の意見を簡潔に提示すれば十分だとも考えられるが、本科目では、この「意見提示」の部分で自身とは反対の意見にも言及するという方法を教えている。以下にそのような方法で書いた「問題提起」と「意見提示」の例文を示す。

問題提起

中学校における部活動は義務化すべきか。

意見提示

私は、義務化すべきではないと考える。確かに、部活動は生徒が成長する場となるため、部活動を義務化した方がよいと考える人もいるかもしれない。しかし、むしろ部活動に限らずその他の活動

や習い事等にも参加できる環境を整える方が、より生徒の成長を促すことになると考えられる。

この例文の「意見提示」では、まず「私は～と考える。」と自身の意見を示している。続いて「確かに～かもしれない。」と自身の意見とは反対の意見に言及し、最後に「しかし、～。」と自身とは反対の意見に対する反論を述べている。このように「確かに～。しかし～。」という言い回しを用いて自身の意見とは反対の意見に触れる書き方は、「視野の広さをアピール」する等の目的で、小論文ではよく用いられるものである⁷⁾。だがそれだけではなく、このような書き方に取り組ませることは、学生の〈対話〉する力を向上させ、そしてそのような〈対話〉力の向上は、より説得力のある文章が書けるようになることにつながると考えられる。

平田（2015）は、「対話」（Dialogue）とは、他人と交わす新たな情報交換や交流のことである。「会話」（Conversation）とは、すでに知り合った者同士の楽しいお喋りのことである」と「対話」と「会話」の違いを示しつつ、「世界は複雑化し、現代を生きる日本人は、他者との出会い、異文化との出会いを必然的に迫られ、対話の能力は以前にも増して要求されている」と述べている⁸⁾。また暉峻（2017）は「対話は、議論して勝ち負けを決めるとか、意図的にある結論に持っていくとか、異議を許さないという話し方ではない」、「対話とは、対等な人間関係の中での相互性がある話し方で、何度も論点を往復しているうちに、新しい視野が開け、新しい創造的な何かが生まれる。両方の主張を機械的にガラガラポンと足して二で割ると妥協とは違う」⁹⁾と述べている。

平田や暉峻の論をもとに考えるならば、〈対話〉とは〈他者〉とともに考えることだと言えそうだが、自身とは反対の意見に言及する方法で小論文を書くことは、この〈対話〉的な思考の一つの実践として捉えることもできる。授業では、学生に自身とは反対の意見に対する反論を書かせる際、なるべく相手が納得してくれそうな反論を考えてみるよう声かけをしているが、そのように〈他者〉の考えに寄り添い、〈他者〉と価値観や目標等を共有しながら反論を試みることは、〈対話〉する力を伸ばすことにつながると考えられる。そして、そのような〈対話〉的な思考によって書かれた文章は、書き手とは異なる意見を持った〈他者〉から見ても、十分に説得力のあるものになると言えるだろう。

5. おわりに（大場）

Received date 2023年11月1日

Accepted date 2023年12月20日

以上のように、本稿では3名の研究者による「日本語表現法Ⅰ・Ⅱ」の授業実践を、「レポート」、「プレゼンテーション」、「小論文」というテーマ毎にまとめている。本稿では、「日本語表現法Ⅰ・Ⅱ」を、大学に進学したばかりの大学生がアカデミックな教養と出会う場として位置付けている。すなわち、ゼミなどでのプレゼンテーションや卒業論文執筆などを想定し、その執筆の基礎を学ぶアカデミック・ライティングの機会となると同時に、大学に入学して初めて教養と出会う学生にとっての初年次教育を受ける機会ともなっているのだ。執筆者の教員3名は全員、文学を専門としており、授業内の雑談などでも文学研究・文化研究の知見が生かされていることは想像に難くない。それぞれの授業ではスライドを用いたり、グループディスカッションを行ったりといった、学生の理解を促す工夫がなされており、本稿での授業実践の分析が今後の大学教育に生かされることを願っている。

参考文献・注

- 1) 筒井洋一（1998）：大学生に日本語を教える授業が広がっている——日本語表現法科目の効果的な実施のために。大学と教育, 22, 2-15.
- 2) 文学研究者の実践報告には他に次の論文がある。
高橋秀太郎, 岸本洋輔, 河内聡子他（2016）：大学・高専における日本語表現系講義の実践報告。東北工業大学紀要, 36, 43-52.
- 3) 文部科学省（2018）：高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編。文部科学省, pp. 1-282.
- 4) 大内裕和（2022）：なぜ日本の教育は迷走するのか——ブラック化する教育2019-2022。青土社, p.88.
- 5) 楊寧, 須長正治, 藤紀里子, 伊原久裕（2019）：ユニバーサルデザインフォントの可読性：ユニバーサルデザインフォントの評価に関する研究(2)。デザイン学研究, 65(4), 1-8.
- 6) 今道琢也（2018）：全試験対応！ 直前でも一発合格！ 落とされない小論文。ダイヤモンド社, p.6.
- 7) 樋口裕一（2010）：小論文これだけ！ 人文・情報・教育編。東洋経済新報社, p.12.
- 8) 平田オリザ（2015）：対話のレッスン 日本人のためのコミュニケーション術。講談社学術文庫, pp.16-19.
- 9) 暉峻淑子（2017）：対話する社会へ。岩波新書, pp. v - vi.